2019.2.5

博物館 Dictionary No.214

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

平成知新館1F-3（書跡）に展示されている作品について勉強してみよう。

後陽成天皇の書
―新時代のパイオニア―

漢字、あるいは平仮名や片仮名をはじめ、わたしたちが何気なく使っている文字には、どんな役割があると思いますか？まず、浮かんでくるのは、これらを用いて記した情報を人に伝える〈記号〉としての役割でしょう。一方、情報を表すための文字そのものを視覚的にとらえた時、「上手いな」とか「美しいな」などの印象を抱くことを考えると、姿形を味わう〈造形〉としての役割というもう一つの顔が見えてきます。芸術の分野では、文字の持つ役割のうち、後者に重きを置いた場合、これを「書（しょ）」とよんでいます。

図1　重要美術品「龍虎」「梅竹」大字　後陽成天皇宸翰　桃山時代（16～17世紀）　法金剛院蔵

書には長い長い歴史があり、新たな時代を切り開いたとして高く評価されている人たちが数多く現れました。日本では、「弘法も筆の誤り」「弘法筆を選ばず」のことわざで知られる空海（弘法大師、774～835）が有名です。また、長らく書の規範となった「和様」を完成させた小野道風（894～966）、藤原佐理（944～998）、藤原行成（972～1027）の「三跡」も欠かせません。そして、ここで取り上げる後陽成天皇も、彼らと同じく、

大きな足跡をのこした一人といえます。

後陽成天皇は元亀２年（1571）12 月、誠仁親王の第一皇子として生まれました。母は勧修寺晴右の娘（新上東門院）で、諱を和仁（のち、周仁と改名）といいます。父の薨去、祖父である正親町天皇の譲位にともない、天正 14 年（1586）11 月に天皇として即位し、慶長 16 年（1611）３月まで在位すること 26 年、元和３年（1617）８月に 47 歳で崩御しました。織田信長や豊臣秀吉、さらには徳川家康の登場と、国内情勢が目まぐるしく変化した時代なので、どうしても覇者たちの陰に隠れてしまう感じは否めません。しかし、後陽成天皇こそが、この時代における書の革新をリードした立役者なのです。

縦が１メートルを超える紙に、「龍虎」と「梅竹」の字を書いた大作を見てみましょう（図１）。作品を収める箱に記された文章によると、後陽成天皇の中陰仏事に出仕した法金剛院の住職がお布施として拝領したもので、もともと表装には天皇の衣装を用いていたが、近衛家久（1687 ～ 1737）から贈られた裂地へ改めたといいます。子細に眺めると、力強く大空を舞う「龍」、これと対峙するかのように、大地に足を踏みしめ尻尾をピンと跳ね上げる「虎」、といった具合に４つの書が対象物を正確にイメージさせ、それにより一層の迫力を演出する驚くべき仕掛けがなされているのです。まるで、メールやラインで頻繁に使う絵文字を彷彿とさせます。つまり、後陽成天皇による革新とは、表現の可能性を追求したところにあると考えられます。

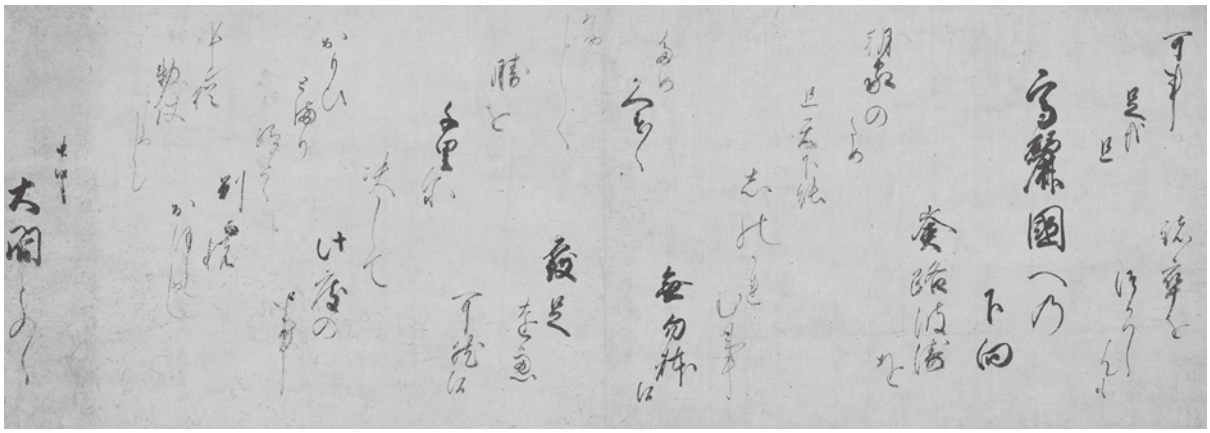

図２　重要文化財　後陽成天皇宸翰消息　桃山時代　文禄元年（1592）　京都国立博物館蔵（守屋コレクション）

では、こうした冒険をなし得た背景に存在するのは何かといえば、基礎となる伝統の習得にほかなりません。代表的な例として、後陽成天皇が豊臣秀吉にあてた手紙をごらんください（図２）。本文は文章をいくつかのパーツに分け、紙面に配する「散らし書き」とよばれる方法で書かれ、文禄の役で朝鮮半島への自らの渡海を強行しようとした秀吉を諫めています。記された内容はきわめて深刻でありながら、これを書として見ると、リズムや余白のとり方がすばらしく、三跡によって大成した和様の影響が顕著で、天皇が伝統を重視していたことを十二分にうかがわせるのです。

築かれた伝統を重視しながら、そこに胡座をかかず新たなチャレンジをする、現代にも通用する教訓を学べるような気がします。

（美術室　羽田　聡）

印刷・富士印刷社